



令和2年度 さいたま市立土呂中学校 学校だより

見沼のほとり

第 6 号

令和2年9月1日

学校教育目標

主体的に生きる人間の育成 <意欲・健康・豊かな心>

ドラマチック 土呂中

校長 富田 敦

最終回、ワンアウト、ランナーは2・3塁、一打出れば逆転サヨナラ勝ち。バッターは3番吉田啓明くん。

真夏の宮原中グラウンドはピンと張りつめた緊張感に包まれています。8月2日、雨で延期になっていた野球部の北区交流親善試合、土呂中学校にとっての最終試合です。対戦校は強豪、昨秋の市新人体育大会の優勝校です。県大会でもベスト16に入っています。勝っても負けてもこれが中学校生活最後の試合、土呂中学校は強豪校に食らいつき、先制点を奪われてもあきらめません。相手校もレギュラーメンバーで固め、土呂中から勝利を得ようと必死です。

最終回7回表を終えて、3対5、2点差で負けています。

後攻の土呂中は、円陣を組みます。榎本裕一監督は「このまま終わるな、1点取るぞ」と檄を飛ばします。しかし先頭打者が倒れワンアウト、9番

TEAM	一	二	三	四	五	六	七	八	九	計
30	10	00	01	01	01	01	01	01	01	5
00	02	00	01	01	01	01	01	01	01	6

野坂健介くんがバッターボックスに入ります。快音響き、打球は左中間を真っ二つ、ツーベースヒット、反撃の狼煙です。続くのは1番キャプテンの石綿亮太くん、土呂中一番のファイター。ピッチャーを見据えます。石綿くんも思い切りよくバットを振ります。自分のイメージではレフト方向、しかし、タイミングがわずかに合わず、打球はライト方向に…一瞬ダメかと誰もが思いましたが、相手右翼手の前にポトリと落ちるヒット。思い切りの良さが幸運を呼び込みます。ワンアウトでランナーが二人、塁を埋めます。続くのは2番鹿久保慎太朗くん（2年生）、「初回、自分がミスをして失点してしまいました。だから、ここでヒットを打たなければ、と強く思っていました。」しかし、ポンポンとツーストライク、追い込まれてしまいました。2球ボールを見極めます。5球目、ボールに逆らわず、でも思い切りバットを振ります。打球はレフトオーバー、ツーベースヒット。1点を返します。これで4対5、1点差に迫りました。



キャプテン 石綿くん

最終回、ワンアウト、ランナーは2・3塁、一打出れば逆転サヨナラ勝ち。バッターは3番吉田啓明くん。左バッターボックスに入ります。屈伸をし、ホームベースを軽くたたきます。右手でヘルメットのつばを軽くつかみ、バットを胸の前で回し、右腕を軽く伸ばします。吉田くんのルーティーンです。相手ピッチャーも懸命です。ツーボール、ツーストライク、5球目を渾身の力を込めて投げ込みます。インコース、高めに来たボールをフルスイング。今までで一番いい感触をグリップで感じました。打球は青空に向かって一直線、「越えた…」吉田くんは無我夢中で走り出します。3塁ランナー石綿くんはタッチアップのため3塁ベースに戻ります。2塁ランナー鹿久保くんは、吉田くんが打った瞬間にライトオーバーを確信し3塁ベースに向かって走り出します。打球が右翼手の向こうで落ちたことを確認し、石綿くんが全力でホームベースを踏みます。その直後、逆転のランナー鹿久保くんが風のようにホームベースを駆け抜けます。

「勝った！」逆転サヨナラ勝ち！土呂中ナインの笑顔がはじけます。応援の保護者も大喜びです。

石綿くんは話します。「強いチームに勝てるとは思わなかったです。本当にうれしい。最後まであきらめずにやり通してよかったです。」吉田くん「自分は長距離バッターではありませんが、コンパクトに振りぬくという理想のバッティングを、中学校の野球生活最後の打席ですることができました。腰を痛めてシニアの野球チームをやめた自分を、途中入部でありながら受け入れてくれた野球部のみんな。みんなは自分のことを受け入れてくれていましたが、僕は『あとから入った自分が試合に出ているのだろうか』という葛藤が常にありました。でも最後の試合を経験し、土呂中学校の野球部員として一つの仲間になれたと心から思います。」

2年前、彼らは、キャッチボールや内野のボール回しさえ満足にできない新入部員でした。たった2年間でこんなドラマチックな試合の主役となり、私たちを興奮のつばに引き込んでくれたのです。